

〔最終講義〕

「29年間ドイツ語を教えて」

長崎 孝

「29年間ドイツ語を教えて」というタイトルで、私なりに最後の話をさせていただきたいと思います。私が立命館大学のドイツ語教員として採用されまして産業社会学部に赴任いたしましたのは、1976年（昭和51年）4月1日のことであります。それ以来ずっと、時間割の都合で時たま経済学部や経営学部へ教えに行ったこともありますが、主として産業社会学部でドイツ語を教えてまいりました。2005年（平成17年）3月31日で丁度29年間ドイツ語を担当してきたことになります。立命館は民主的な大学で、会議が多いと聞いていましたが、入ってみますと持ちコマのノルマもございます。今は外国語は6コマですが、私が入った頃は週7コマでありまして、大変忙しく、びっくりいたしました。会議も多くて、特に外国語担当の教員は、学部組織と外国語関係の組織という二つの組織に属さねばなりません。大変苦しかったのを覚えております。もう少し合理化されたシンプルな組織構成にならないものかと思ったこともありました。

楽しかった思い出もあります。未だベルリンの壁が崩れず東ドイツが健在だった頃、私は日本独文学会の推薦で、ハレで行われました国際ドイツ語ドイツ文学講習会に参加することができました。1981年（昭和56年）7月のことです。この講習会とはとても充実した、よい講習会でした。ドイツから離れて日本は遠いですが、その頃日本の学者でドイツ語をやっている人は本の上でしかドイツ語を学んできていない。ただ読むだけで、聞いたりしゃべったりするのはほとんどの人がだめでした。私もそうでありまして、この講習会はすぐに対応してくれました。読めるのは読めるけれども聞いたり、話すのが苦手なロシア人2人と日本人2人ポーランド人1人の、5人のクラスを早速作ってくれ、丁寧に対応してくれました。当時、東独は社会主義圏の中では優等生と言われたもので、社会主義の中でソ連の体制が崩壊していない頃ですから経済活動が密接で、その中でも東独は経済的にトップレベルにあったんです。ここの講習会は本当によかったなと強い印象を今でも持っております。

この講習会中に、ライプツィヒやワイマール—ワイマールはゲータが過ごした町—、エアフルト、ドレーズデンなど東独のほとんど主だった都市に連れていってもらいました。この講習会が一月近くあり、その後、当時立命館大学はベルリンのフンボルト大学と提携しておりましたので、引き続きフンボルト大学にお世話になりました。フンボルト大学は昔のベルリン大学、森鷗外、北里

* 立命館大学産業社会学部教授，2005年3月31日退職

柴三郎が学んだトップの大学です。そこにお世話になりましてベルリンに半月ほどおりました。ほとんどの東独の重要な町を講習会とフンボルト大学のおかげで見せていただくことができました。その頃は社会主義体制ですから、働けばご飯が食べられるということで失業者がいない、そういう、よき時代の東ドイツでした。

こうしてベルリンのフンボルト大学に滞在した後、西側に出まして、西ドイツ国内を20日ほど旅して帰国いたしました。ベルリンの壁が崩れる以前の東ドイツと西ドイツを同時に見るという、大変貴重な体験をすることができました。

1981年（昭和56年）10月から半年間私は西ドイツのフライブルク大学に留学させていただきました。「ドイツ語を話す国々」の地図を見ていただきますと、フライブルグはフランスとの国境地帯です。なぜこんな果ての方に行ったかといいますと、東西対立の厳しい時代でいつミサイルが飛んでくるかわからんということと、私が研究しているゴットフリート・ケラーの研究家でドイツでトップの人であるゲルハルト・カイザー教授がここにおられたからです。その時には大学の講義にも出ましたが、何とかドイツ人と同じようにドイツ語がわかりしゃべれるになりたいものだと思います。テレビをみるのが一番いいと実感いたしました。言葉と映像が一致するのですごく上達が早いんですね。必死でテレビを見ておりました。

ゲルハルト・カイザー教授にはケラー関係の文献の読書指導をしていただきました。教授には、ケラー文献を「この順番に読みなさい」と番号を振っていただき、指導をしていただきありがたかったです。ドイツは南の方からだんだん文化が浸透してきた、南の方に大学が多いんです。文化的水準が高い。フライブルグの大学はドイツ語ドイツ文学に限っては、ゲルマニスティックで、私が欲しいと思った文献がほとんど揃っておりました。日本の東大にも京大にもない文献がここにはほとんどある、すばらしい図書館で、欲しい文献をほとんどコピーして持ち帰ることができました。

その後、1995年前期には半年間、エアランゲン－ニュルンベルク大学へ留学いたしました。ニュルンベルクは人口が49万でドイツでも大都市です。ところがエアランゲンという町はニュルンベルクからバスで30分ほど行く小さな町で、エアランゲンという人口10万ほどの町に大学の学舎が固まっています。エアランゲン大学はニュルンベルクにあった師範学校と、1968年の大学紛争の後に合併したんだそうです。それで正式にはエアランゲン－ニュルンベルク大学と言います。ニュルンベルクにはほとんど学舎はありません。エアランゲンは歴史はあるんですが、私が行った時は小さな町だなと、がっかりしました。市電が走っていない。ドイツの市電は公害を出さないということで見直されてきています。エアランゲンには市電もなく、バスが網の目のように走るんですが、地下鉄もなく、来るところを間違ったかなと最初思いましたが、そうではない。ニュルンベルクという大都市が近くにあるので、ニュルンベルクの衛星都市のエアランゲンに来たと理解すればいいと気づきました。

この2回目の留学の時には、もう最後の機会だと思い、あちこちまだ行ってないところを旅行しました。まずミュンヘン、次いでケルンの西方にあるアーヘンを訪れました。フランク王国のカール大帝が戴冠したのがこのアーヘンです。フランク王国の流れが3つに分かれる。東フランクが

ドイツ、西フランクはフランス、それにロタールの王国がイタリアになっていきます。東フランクの歴史をたどりますと、カール大帝が西暦800年、西ローマ帝国の復活というような形で戴冠するところへ行きます。それで、カール大帝がドイツ人の大元となっているわけです。

それから、チェコのプラーク―これはフランツ・カフカが暮らした町です―を訪れ、さらにザルツブルク、リンツ、ウィーン、グラーツ、インスブルックと、オーストリアの主要都市をほとんど見てまわりました。特にウィーンのすばらしさには完全に魅了されて、ウィーンだけで一月以上も滞在しました。ドイツ、オーストリア、スイスといったドイツ語を話すドイツ語圏の中で、何といっても最も魅力的な町はウィーンです。すばらしいところです。最近では簡単に行けますから、ぜひ、生涯に一度は訪れてほしいと思います。

私が立命館にまいりました頃は、第二外国語といえばドイツ語とフランス語だけでありました。4月に新入生をとりすぎた時は、ドイツ語の先生を確保するのに走りまわらなければならないということはありませんでしたがなんとか対応でき、15年ほど過ごしました。そのうち日本を取り巻く世界情勢が大きく変わりまして、日中国交回復に伴い、中国語が第二外国語の選択肢として加わりました。中国は、地理的に日本に近いですし、文化的に長い間、交流があって、同じ漢字圏です。中国語を選択する学生が急増しまして、その分、ドイツ語やフランス語を選択する学生が激減しました。その後またスペイン語が選択肢に加えられると、スペイン語はやさしいそうだというおかしな噂が学生の間に広まりまして、スペイン語も急増になりました。さらに最近では、朝鮮語が選択肢に加えられると、韓流ブームとかで朝鮮語をとる学生が増えまして、ドイツ語、フランス語をとる学生が激減し、ドイツ語、フランス語にとっては大変困ったことになったわけです。

ドイツ語もフランス語も選択する学生が激減して、担当教員の持ちコマが埋まらない、大げさないうとドイツ語、フランス語を担当している先生が、生活できないということになったんですね。非常に困った状況になったわけです。私は文学を研究していますから「外国の文学」とか、幕末から明治、大正にかけて外国と接する時、どのように先輩たちが異文化を苦勞して受容してきたかという「異文化コミュニケーション」といった講義科目を持っておりました。3、4回生ゼミを持ったこともあります。これは、ドイツ語だけ教えていてもやっていけなくなってきたという背景があります。こういう状況で、ドイツ語担当者としては、大変さびしい思いをしています。

私は、40歳代後半のことですが、家庭で電球を交換していて踏み台から落ち腰を強く打ち、それ以来、腰痛が起こって大変苦しみました。5年ほど前にはメニエール病という大病を患いました。これは軽い場合はいいんですが、私の場合は重かったので、電車からホームに出てひっくり返りまして、三半規管の平衡感覚が完全に失われて、立ち上がれないという大病を患いました。気分が悪くなって吐き気がしたり、非常に苦勞しました。それで身体が悪くなってからはあまり研究成果が上がらなくて、申し訳ないと思っていますが、私の研究のことを述べておきます。

私が最初に取りこんだドイツの文学者は、フランツ・カフカです。彼は、1883年に、当時オーストリア＝ハンガリー帝国領であった、チェコのプラークに生まれ、ドイツ語で作品を書いた、ユダヤ系の作家です。29歳になった1912年以降、彼は次々と作品を執筆発表していきました。「審判」

（Der Prozeß）は、1914年にその大半が書かれた、未完未発表の長篇小説で、カフカの死後マックス・ブロートによって発表されました。この頃ドイツ・オーストリアは第一次世界大戦へと突入し敗戦へと向かう暗い時代で、個人的にはカフカは肺結核を患っていたのです。こういったことが背景にあるのですが、カフカ作品は、時代が進むとともにますます暗くなっていきました。いちの望みがあるかなきかの世界から暗闇の世界へと入っていきます。カフカはカトリックないしはユダヤ教という宗教の世界へと向かう実存主義者だというのが私のカフカ理解ですが、その世界は読み続けられないほど暗い。それで私は、「審判」を論文にまとめると、カフカの研究をやめてしまいました。

次いで私が取り組んだのは、詩的リアリズムの巨匠といわれるゴットフリート・ケラーです。この作家は、1819年にスイスのチューリッヒに生まれ、1848年29歳の時に、チューリッヒ政府の奨学金を得てドイツのハイデルベルクに留学しました。2年後ベルリンに移りましたが、1855年チューリッヒに帰り、その後チューリッヒを中心に活躍しました。1890年に70歳で亡くなりました。

私は、1856年ケラー 36歳の時に出版されました「ゼルトヴィーラの人々」（Die Leute von Seldwyla）第1部を取り上げ、その中に収められた「ふくれっつらのパンクラーツ」と「アムライン夫人とその末子」に登場する二人の若者パンクラーツとフリッツ・アムラインの類似性に着目いたしました。この二人の若者に焦点を当て論究、論文にまとめました。ケラーが生きた時代がドイツの明るい時代であったという背景もあるのですが、ケラーの世界は明るいのです。読んでいて気が合うというか本当に楽しいのです。

しかし、先に触れましたように私の健康状態が悪くなり、私のケラー研究も中断してしまいました。心残りですが仕方がありません。

これで私の話を終わらせていただきます。長い間、どうもありがとうございました。

〔資料〕

長崎 孝教授 略歴と業績

略 歴

- 1939年12月22日 京都府舞鶴市に生まれる
- 1959年3月 京都府立宮津高等学校卒業
- 1959年4月 京都大学文学部入学
- 1963年3月 京都大学文学部哲学科卒業
- 1963年4月 兵庫県立尼崎高等学校教諭
- 1964年4月 大阪府立寝屋川高等学校教諭（全日制課程）
- 1966年4月 大阪府立寝屋川高等学校教諭（定時制課程）
- 1970年4月 大阪市立大学大学院文学研究科修士課程入学（独文学専攻）
- 1973年3月 大阪市立大学大学院文学研究科修士課程修了 文学修士
- 1973年4月 大阪市立大学大学院文学研究科博士課程入学（独文学専攻）
- 1975年4月 龍谷大学，追手門学院大学非常勤講師
- 1976年3月 大阪市立大学大学院文学研究科博士課程単位取得退学
- 1976年3月 大阪府立寝屋川高等学校退職（定時制課程）
- 1976年4月 立命館大学産業社会学部助教授（ドイツ語）
- 1981年10月 西ドイツフライブルク大学へ留学（6ヶ月間）
- 1986年4月 立命館大学産業社会学部教授
- 1995年3月 ドイツエアランゲン-ニュルンベルク大学へ留学（6ヶ月間）
- 2005年3月 立命館大学産業社会学部教授定年退職

学内役職歴

- 1976年4月 外国語連絡協議会運営委員（1977年3月まで）
- 1984年4月 学生主事（1985年3月まで）
- 2003年4月 ドイツ語部会長（2004年3月まで）

所属学会

- 日本独文学会会員
- 19世紀ドイツ文学研究会会員
- 京都ドイツ文学会会員

阪神ドイツ文学会会員

研究業績

著 書

- （1）共著「ドイツ文法の基礎」三修社 1981

論 文

- （1）単著「『村のロメオとユリア』の作品構成」大阪市立大学大学院文学研究科「人文論叢」第1・2合併号 1976
- （2）単著「『審判』（Der Prozeß）とその実存性」立命館大学「外国文学研究」第44号 1978
- （3）単著「『村のロメオとユリア』にあらわれた人間と社会」19世紀ドイツ文学研究会編「19世紀ドイツ文学の展望」（郁文堂）所収 1981
- （4）単著「西ドイツのラジオ，テレビ放送」立命館大学「外国文学研究」第62号 1984
- （5）単著「Seldwyla における二人の青年の形姿」（1）立命館大学「外国文学研究」第68号 1985
- （6）単著「Seldwyla における二人の青年の形姿」（2）立命館大学「外国文学研究」第70号 1986